

(カ) いけばな

神前の依代^{よりしろ}や仏前に花を手向ける供花を源流に持つ「いけばな」の成立は、室町時代に珍しい花を唐物の花瓶に挿して並べ優劣を競う「花合わせ」や、仏教的行事「法楽」の飾りなどとも、深く関わっていたと思われる。

応永6年（1399）三代將軍足利義満は、完成した北山殿^{ろくおんじ}（鹿苑寺）で「七夕花合わせ」を催し、以後幕府において毎年行われる慣例行事となった。頂法寺六角堂^{ちやうほうじ}の僧である池坊専慶^{いけのぼうせんけい}は立花の名手と知られ、寛正3年（1462）佐々木持清に招かれ、金瓶に草花を数十枝挿した。それを洛中の好事家が競って見物したと伝えられている。



図2-57 六角堂（頂法寺）と池坊

その後、同じく六角堂の僧である池坊専応は度々宮中に招かれて花を立て、また立花の理論と技術を体系化した「池坊専応口伝」を著し、華道が成立した。

江戸時代初期、三十二世池坊専好（1536～1621）は立花の名人で、禁裏において開催された立花会の指導をし、後水尾天皇の寛永文化サロンの担い手の一人となった。

現在、京都には「池坊」をはじめ、江戸時代中期に興った「松月堂古流」、その後の「正風遠州流」や「専慶流」など多くの流派が存在し、一般庶民に教養として親しまれている。また、現代は大覚寺（嵯峨御流）、仁和寺（御室流）、泉涌寺（月輪末生流）など住職が華道の家元を兼ねていることも京都の特色であり、神社仏閣

での展覧会も盛んに行われている。

京都の寺社等では、神仏に花を献じる「献花」も行われており、華道の源流である「仏前供花」の精神を見ることができる。伏見稻荷大社や三十三間堂では毎年池坊により献花の儀が行われる。和銅年間（708～715）に創建された伏見稻荷大社における朱塗りの外拝殿にて、礼式生けの所作で花が生けられる様子は、厳かでいて華やかな風情を醸し出している。



図2-58 献花の儀（伏見稲荷大社）

また、先の「京町家のくらしと地域コミュニティ」の項に示した京町家の中でも、いけばなを嗜む人々が床の間などへ花を飾り、来客者をもてなすなど、人々の間でも日常的にいけばなの営みが行われている。

献花祭などの活動が、寺社等を舞台にして行われ、境内地において華やかな風情を醸し出し、また京町家等での営みにより、もてなしの心を感じさせ、訪れる人々に心の和やかさを感じさせている。

(キ) 美術

京都の絵画の歴史は古く、平安時代に描かれた源氏物語などの絵巻物の「大和絵」、宗教絵画、狩野探幽による御所や二条城の障壁画、琳派を確立した尾形光琳など数多くの優れた絵画や画家を生み出してきた。

近代に入ると、伝統と進取の気風に満ちた取り組みが盛んに行われ、東京と並んで日本の美術界をリードしていった。

そんな中、京都には美術と関わりのある町が形成されてきた。

その一つが寺町通りである。寺町の地に寺院が集められ、寺町といわれるようになったのは